

## Die KPD und "Nationaltradition" in den Jahren der Weimarer Republik

石川, 捷治  
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/16197>

---

出版情報 : 法政研究. 47 (2), pp.571-600, 1981-03. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics)  
Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# ドイツ共産主義運動の《個性》

——コミュニズムと「国民的伝統」へのアプローチ——

石川捷治

はじめに

一、「国民的伝統」とは何か

(一) 「国民的伝統」とは

(二) 「国民的伝統」の二側面

二、コミュニズムと「国民的伝統」

(一) コミュニズムにおける「国民的伝統」の継承の問題

(二) コミュニズムにおける「普遍性」と「個性」

三、ワイマール期におけるドイツ共産党の「個性」

(一) ドイツ共産党の課題

(二) 戦後革命期(一九一八—一九三三年)の統一戦線運動におけるドイツ的「個性」の追求

(a) 社会主義へのドイツの道

(b) 反クローナー統一戦線と「国民的解放」の提起

(c) 一九二三年革命敗北の意味

(三) ファッショ化過程(一九二九—一九三三年)における統一戦線運動の「個性」

(a) 『ドイツ人民の民族的・社会的解放のための綱領的宣言』

(b) 反ファシズム会議運動

むすび

## はつめい

この小論は、「ロミュニズムと国民的伝統」というテーマに、主としてワイマール期におけるドイツ共産党の場合を念頭にアプローチしようとするものである。

今日、いわゆるユーロ・ロミュニズム (Euro Kommunismus) をはじめとして、各国の共産主義政党の多くは、自らを「国民の党」「民族の党」と位置づけている。また、各国のロミュニズムには、それぞれの国民的・民族的特徴や政治風土に根ざした特色がみいだされる。コミンテルン(第三インターナショナル)期のロミュニズムからみると大きな変化である。第一次世界大戦を契機に顕在化した社会民主主義(第二インターナショナル)の「国民化」に対して、そこから分離したロミュニズムは、「インターナショナルイズム」と世界革命の理念をかかげ、単一の「世界政党」(Kommunistische Internationale)を対置した。しかし、国際共産主義運動は、一九三〇〜四〇年代におけるファシズムへの敗北や反ファシズム闘争の歴史的経験のなから、各国におけるナショナルなものを重視する方向へと漸次転換した。一九三五年のコミンテルン第七回大会は、「勤労大衆の民族的感情の軽視」という傾向について自己批判し、「国民的解放」の課題を提起した。

その後の反ファシズム闘争において、フランス共産党(PCF)は、フランス国民の「隷属と抑圧にたいする数世紀の闘争」を誇り、「サンキュロットの曾孫」であると訴え、人民戦線運動を推進した。<sup>2</sup> チェコ共産党(CCP)は、ヒトラーの侵略への抵抗運動のなかで、一五世紀のヤン・フス(Johannes Huss)派の反封建・反カトリックの

民族解放革命運動を闘いのシンボルとした<sup>(3)</sup>。のちにふれるように、民族的抑圧という条件——それも民族的抑圧一般ではなくその特殊な形態の存在という条件——での反ファシズム運動は、自国民の歴史的革命的伝統を前面にかげ、それを自らの運動の正統性の根拠としながら、「愛国的」エネルギーを結集した民族ないしは国民的統一戦線の結成に成功した。

ナチス支配下のドイツ共産党(KPD)は、反ナチ闘争の正統性の根拠の一端と統一戦線運動の立脚点を、歴史的伝統のなかからも導きだそうと試みた。そしてドイツ共産党は、ゲータやシラー等をあげながら、自由とヒューマニズムの伝統の存在を強調し、「反ナチス」こそ「ドイツ的」だと主張した<sup>(4)</sup>。けれどもナチス支配下のドイツにおいては、ほとんど影響をおよぼすことはできなかった。いうまでもなく、反ナチ闘争成否の鍵は、ワイマール共和制期にあったのである。

今日、ドイツ共産党のワイマール期の運動の不成功やナチズムへの敗北についても、「国民的伝統」やナショナルなもの<sup>(5)</sup>の軽視という観点から総括されることが多い。例えば、『ドイツ人民の民族的・社会的解放のための綱領的宣言』(一九三〇年八月)の提出時期の遅さや内容上および適用上の不充分さ等の指摘と関連して論じられている<sup>(6)</sup>。だが、事柄はそれほど単純ではない。ワイマール共和制期のドイツ共産党に、現在の立場からみてそれらへの軽視が存在したことは否めない事実だとしても、ドイツ共産党が「国民的伝統」をより重視しそれを踏まえていたならば、ナチズムにも有効な対応ができ、共産主義運動をさらに発展させえたはずだとは一概に言い切れないからである。「国民的伝統」は多義性を有し、その政治的意味は状況によって大きく変化するものであるが、すくなくとも当時の状況下において、革命を志向するドイツ共産党がそれを立脚点とし、全面的にとりこみうるような可能性が存在したのであろうか？

ワイマール期のドイツ共産党の課題は、「国民的伝統」の継承されるべき側面と克服・変革されるべき側面とを明らかにしつつ、大衆のナショナルな志向を革命の側に組織することにあつた。ドイツ共産党のイニシヤティブのもとに大衆運動として展開された統一戦線運動の場合は、他党派の労働者や大衆との接触を不可欠としたため、その点からより強く意識された。

はたして、ワイマール共和制期においては、 Kommunismus と「国民的伝統」との関係はいかなるものであつたか？ この問いに答えようとすれば、ドイツ共産主義運動の「個性」を論じなければならぬ。それはなぜか。以下、論述するなかで、Kommunismus と「国民的伝統」にかかわる理論的問題を提起したいと考える。まず、「国民的伝統」とは何かを明らかにすることから始めたい。

- (1) 「Kommunismus と国民的伝統」という問題設定は、一九八〇年度日本政治学会研究大会（一九八〇年一〇月一八・一九日、北九州大学法学部にて開催）においてかかげられた分科会のテーマである。
- (2) 『トレーズ政治報告集』第一巻、未来社、一九五六年、二三三ページ。なお、D. R. Brower, *The New Jacobins, The French Communist Party and the Popular Front*, New York, 1968, pp. 197—9, pp. 245—7. を参照された。
- (3) B. レイプゾン、K. シリーニャ・石堂清倫訳『現代革命の理論—コミンテルンの政策転換』合同出版、一九六六年、二七五—六ページ。
- (4) 下村由一『反ファシズム運動とドイツ共産党』（『ファシズム期の国家と社会 8・運動と抵抗』東京大学出版会、一九八〇年、二三三ページ）。
- (5) デイミトロフは、コミンテルン第七回大会において「ドイツにおけるわが同志たちは、ながいあいだ、傷つけられた民族感情と、大衆のヴェルサイユ条約に対する憤りを、計算に入れることに失敗し、……民族的・社会的解放の綱領の提出にたざおくれた」と批判した。(Protokoll des VII. Weltkongresses der Kommunistischen Internationale, I, Erlangen 1974, S. 331, デイミトロフ『反ファシズム統一戦線』、大月書店(国民文庫)一九五五年、三二二ページ。そのよつな

評価は、Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung in acht Bänden, IV, Berlin 1966, S. 261, S. 281. にあつてけつがれてゐる。

## 一、「国民的伝統」とは何か

### (一)「国民的伝統」とは

「国民的伝統」という概念は、把握しにくい。手元にある限りの政治学関係の辞典を引いてみても、「国民的伝統」ないしは「ナショナル・トラディション」という項目が単独ででてくるものは見当らない。「国民的伝統」なる概念は、はたして学問的タームとして成熟しているのかどうか疑問に思われる。日本政治学会企画委員会からは、ユーロ・コミュニズムを踏まえて考えるようにとの示唆をいただいたので、イタリアとスペインなどのユーロ・コミュニズムを研究されている専門家にお尋ねしたが、「国民的伝統」なるタームはイタリアやスペインにおいてもあまり使われていない、とのことであった。

そこで、まず「国民的伝統」とは何かを明らかにすることから作業を始めた。この概念は、きわめて曖昧で多義性をもっている。「国民<sup>(1)</sup>」および「伝統<sup>(2)</sup>」という二つの概念のもつ曖昧さと多義性が自乗化されているといえよう。また、その政治的意味も一定ではない。「国民的伝統」なるタームが一般にはしばしば使用されているにもかかわらず、厳密な学問的定義が存在しない(?)のは、そのような理由によると思われる。したがって、使用されている例からその内容を把握する他はないのであるが、一般的な使用例としては、次のような場合が最も多いようである。それは、「国民的伝統」(national tradition)を「国民的利益」(national interest)および「国民的使命」(national mission)と共に、ナショナルイズム(nationalism)のイデオロギーの構成要素の一つとして、とりあげられる

場合である。<sup>3)</sup>そこでの「国民的伝統」の主張は、国語・習俗・芸術その他の民族文化の保存と発展の要請として現われ、自国の歴史における外敵撃退の伝統の強調、すすんで自国の威信や栄光を高めた、いわゆる民族的英雄の顕彰として発現することが多い。<sup>4)</sup>したがって何をもって「国民的伝統」とするかは立場によってまったく異なる。ただ、その際、「国民的伝統」のシンボルとなる人物や理念や慣習や歴史的事件が、多かれ少なかれ国民意識のなかに、自らの国の歴史と伝統によって正統化されたものとして定着していることが必要である。以上の点からするならば、「国民的伝統」とは、国家ないし民族共同体において将来にわたって保持するに値すると信じられている文化的ないしは精神的な慣習や史実や理念をいうと定義できるかと考えられる。

## (一) 「国民的伝統」の二側面

このように定義した「国民的伝統」には二側面がある。一つは、政治的社会的支配の側によって意識的に<sup>マニピュレート</sup>操作され、あるいは支配の継続のなかで無意識的にうみだされ、国民意識のなかに定着しているものである。いま一つは、支配の側によってではなく、現実生活のなかで、人民が政治権力と闘ってつくりあげたもの、すなわち、いわゆる進歩と革命の伝統である。多くの場合、前者の側面は、その民族や国家に独特なもの、例えば「日本的なるもの」や「ドイツ的なもの」の強調として現われ、<sup>5)</sup>後者は、人類史的普遍性をもつもの、例えば、「デモクラシー」や「自由」を前面に押し出すといった特徴がある。今日の日本でいえば、「戦後民主主義」を「非日本的なもの」として否定するものと、逆に、「戦後民主主義」こそが「国民的伝統」であるとするものが、同じ「国民的伝統」の二つの側面として存在している。現実政治のなかで、前者の側面と後者の側面がどのように現われてくるかは、その民族や国家の歴史および状況によって規定されている。

コミュニズムとの関連でいえば、コミュニズムは前者を否定・克服し、後者を継承・発展させるといふ関係になる。前者の側面の否定・克服に関連した問題は、のちほどドイツのところで見ることにし、まず、継承の問題からみてきたい。

## 二、「コミュニズム」と「国民的伝統」

(一) コミュニズムにおける「国民的伝統」の継承の問題

ディミトロフ (Georgi Dimitroff) は、コミンテルン第七回大会において、次のように論じた。

「プロレタリア国際主義は、それぞれの国でいわば『風土順化』をおこなって、その国の大地にふかく根をおろさなければならぬ。個々の国のプロレタリアートの階級闘争と労働運動の民族的形態は、プロレタリア国際主義に矛盾するものではなく、逆に、ほかならぬこの民族形態においてこそ、プロレタリアートの国際的利益もこれをよく守ることができるのである。<sup>(9)</sup>」

ディミトロフは、コミュニズムの「民族的形態」の必要性を大胆に打ち出した。その後の共産主義運動は、「勤労大衆の民族的感情」を重視し、自国民の革命的伝統とむすびつけた宣伝煽動を展開した。ユーゴやチェコスロバキヤなど東欧諸国の統一戦線、イタリアの反ナチ闘争、中国の抗日民族統一戦線、さらには、ベトナムをはじめとする東南アジアの民族解放統一戦線などは、大きな成功をおさめた。しかし、このことをもって、すべての国のコミュニズムが「国民的伝統」を安易に立脚点としたり、継承できるのだと考えるならば誤りである。なぜならば、これらの諸国における特殊な条件の存在を忘れてはならないからである。その条件とは、次のようなものである。

(イ) ファシスト帝国主義などの外国からの侵略、またはそれによる植民地ないしは半植民地支配の存在。



(ロ) 外国の侵略や植民地支配に対して、自国の支配階級内部に外敵に協力する勢力の存在。

(ハ) 共産党が「国民的」ないしは「民族的」というシンボルをかがげ、「国民的(民族的)解放」を積極的に提起したこと。

客観的条件としての(イ)(ロ)という民族的抑圧の存在という状況下において、(ハ)の主体的働きかけが効果をあげたのであるが、この場合、コミュニストが「国民的伝統」や「ナショナルなもの」を前面に出したことが基本的な成功原因であったのかというと、必ずしもそうではない。基本的には、民族的抑圧という状況そのものが、大衆エネルギーを結集させたのである。「国民的伝統」というシンボルの政治的機能は、いうならば、それを促進させる触媒の役割であったといえよう。

民族的抑圧という状況がない場合はどうであろうか。統一戦線の成立は、大衆の間における何らかの危機感を背景として可能となる。その危機感が、「ナショナルなもの」の防衛や既存の価値意識に支えられたものであった場合は、戦線の幅というか、そこに結集する国民諸階層の幅に拡がりが見られる。「国民的伝統」を含む「ナショナルなもの」は、ここでは統一戦線の成立を促進させる要因として作用する。しかし、その統一戦線が、それらの防衛に成功し、それよりさらに進んだ目標をかかげようとするとき、それは阻止要因に転じる。例えば、フランス人民戦線は、ファシズムからの第三共和制の防衛を当面の目標に、フランス国民の「ナショナルな感情」——この中には、対独感情などもあると思われるが——を呼びおこすことに成功し目的を達する。その際、フランス共産党は、さきにつれたようにフランス国民の革命的伝統とサンキュロットや三色旗などのシンボルを大胆に提起し、結集のための大きな力となった。しかし、フランス人民戦線は、防衛から攻撃へと継続的な前進には成功しなかった。結集のための促進要因そのものが、攻撃のためのさらなる前進にとってのブレーキとなったのである。整理すると、民族的抑圧という状

況のあるなしによつて、「国民的伝統」がコミニズムとの関連においてもつ意味がまったく変わつてくる。民族的抑圧のない場合には、たとえばフランスのように、進歩と革命の伝統の比較的強い国においても、既存の諸価値の防衛を目的とする運動においては、「国民的伝統」は前進への大きな役割を果たすが、コミニズムがそれをつつみこみ運動結集の基盤とした場合、運動をコミニズム本来の目標である体制変革へとつなぐことが非常に困難となる。それは、いうならば「革命的飛躍」の困難性の問題である。

コミニズムと「国民的伝統」との関連、とくにコミニズムによるその継承については、かなり限定的であるといわざるをえない。とくに、ドイツにおいては、のちにふれるように、その関連と継承の領域は小さいと思われる。だとするならば、ドイツ共産党においては、「国民的伝統」の継承というよりは、その新しい形成こそが問題であったのである。

(一) コミニズムにおける「普遍性」と「個性」

ドイツ共産党が、「国民的伝統」の「継承」ではなく、その克服と新しい形成を問題としなければならなかったとすれば、その形成への努力がいかなる方向でなされつつあったか？ これを探るためには、ドイツの現実のなかから生みだされた共産主義運動の民族的形態、すなわち「個性」を抽出してみる必要がある。

コミニズムは世界的「普遍性」を主張する。それは理念としての世界革命、プロレタリア国際主義、プロレタリアート独裁などにあらわされ、さらにコミンテルンの時代は、「単一世界政党」という組織形態もそこから導きだされてきた。<sup>(8)</sup>しかし、実際のコミニズムの運動は、それぞれの国家ないし民族を単位とし、そこでの革命をめざして展開される。だから、コミニズムは、その国家や民族の具体的条件を反映した「個性」をもたざるをえなくなつて

くる。普通、「個性」というと、「普遍性」と対立するものとして捉えられがちであるが、ここでの「個性」は、あくまで「普遍的価値」を追求する運動の民族的形態としての「個性」のことである。コミュニズムにおいては、「個性」と「普遍性」は、相互規定性があり、その相互関係が状況に応じて巧みに結合されないとコミュニズムの運動は行き詰まる。「国民的伝統」との関連でいえば、普遍的価値の追求を内包する「個性」の追求と、その蓄積が反体制運動の側による新しい「国民的伝統」の形成を促すという関係にある。であるから、今日にみられるユーロ・コミュニズムの民族的特性についても、たんに「国民的伝統」によって規定されているという視点だけでは論じられないものがあると思われる。

以下、ヴェルサイユ体制、ワイマール体制、ナチズムの台頭という状況のなかで、ドイツ共産党によって、普遍的価値追求のためにドイツ的条件を反映した「個性」の追求がいかなされたか？ また、それがもった意味と問題性について考察してみたい。

(1) 「国民」(Nation) 概念のもつ多義性と曖昧性については、安部博純「ナショナルリズムの類型と本質(1)」(『北九州大学商経論集』第四巻第一・二号、一九六九年刊・所収)一八一—一八三ページを参照されたい。

(2) ちなみに、「伝統」とは、次のように定義されている。

「一定の人間集団、しかし人為的につくられ、したがって容易に解体できる、いわばフィクションとしての性格をもつ集団ではなくして、長い歴史をもち、そのうちで構成員を再生産してきた共同体的な性格をもつ集団(とりわけ民族)において、将来にわたって保持するに値すると信じられている文化的、ないしは精神的な慣習のこと。

このように伝統概念は価値判断を伴う概念であるゆえ、過去から単に存続しているものとしての「慣習」とは異なる。またそれは文化的、ないしは精神的な慣習として、なんらかの実体を伴うものであるゆえ、抽象的な「理念」とも異なる。

伝統という用語は、明治期にトラディションという西欧語の訳語として新しく作られた用語である。トラディションという西欧語が登場したのは、一五四一年のカルヴァンの文書をもって嚆矢とするといわれているが、これは総じて伝統概念がどのようなものであるかを示唆しているものといえよう。つまり伝統概念は、西欧の場合はルネサンス以降、日本の場合は明治維新以降、共同体的な閉じられた性格をもつ集団のなから、それを打破する開かれた思想の新しい手としての個人が登場し、共同体的な規制力が弱体化する状況が生ずるに及んで、それに対処する姿勢のものにはじめて用いられ、あるいは創出されるにいたったものである。伝統は文化的、ないしは精神的慣習であるから、人為的でないあらゆる領域に認められるものであるが、伝統概念の発生の事情に徹して明らかないように、それは比較的に対象化、合理化の困難な、いわば非合理主義的、情緒的な領域で問題となる。このことは伝統がその本性上、対象化、合理化を忌諱する性格のものとして成り立っているということを示している。したがって、伝統は共同体的な集団の悪しき慣習としての因襲に墮する危険性を、つねに自らのうちにはらんでいる。それゆえ、伝統の生命は対象化、合理化を旨とす運動との緊張関係のうちに見いだされるといえよう。」（『哲学事典』平凡社、一九七一年、九九〇—九九一ページ）

(3) F. Hertz, *Nationality in history and politics*, 1944, pp. 18—20.

(4) 丸山真男「ナショナリズム」（『政治学辞典』平凡社、一九五四年、一〇三五ページ）、同『増補版・現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年、二八一—二八二ページ。

(5) 「日本的なるもの」については、福田敏一「日本における『国民的なもの』の形成」（『思想』一九六二年六月号、所収）を参照されたい。

(6) *Protokoll des VII. Weltkongresses der K. I. a. a. O.*, S. 370. (ディミトロフ前掲『反ファシズム統一戦線』、一〇七ページ。)

(7) フランス人民戦線の解体については、平瀬徹也『フランス人民戦線』近藤出版社、一九七四年、一七一—二二四ページ、野地孝一「フランス人民戦線の崩壊——左翼議会連合の運命と政党体系の特質——」（『思想』一九八〇年七月号）を参照されたい。

(8) 「単一世界政党」としての問題性については、加藤哲郎「世界政党と政策転換（一九三四—三五年）——コミンテルンの政治学的予備考察」（『』、名古屋大学『法政論集』第七八・七九号、一九七九年、所収）、および同「コミンテルンの綱

領問題——世界政党的イデオロギー的統合——」(一)(二)(四)(同誌、第八〇・八一・八二・八三号、一九七九—八〇年刊所収)がするどい分析をしている。

(9)「普遍」にたいしては「個別」という概念が対であるが、『哲学辞典(増補版)』青木書店、一九七一年、一五二—一五三頁、ここでは「個性」という概念をもちいることにした。

### 三、ワイマール期におけるドイツ共産党の「個性」

#### (一)ドイツ共産党の課題

ドイツ・コミニズムは、第一次世界大戦を契機に顕在化した第二インターナショナルとドイツ社会民主党(SPD)の「国民化」に対決し、そこから分離することにより自己を形成した。一九一八年一月に党を創立するが、真の意味で大衆的労働者政党となるのは、二〇年一月、反カッブ統一戦線の経験を経て独立社会民主党(USPD)左派との合同を実現したのちである。

さて、KPDが対応をせまられたドイツの「国民的伝統」とはいかなるものであったか？ さきにふれたように、ドイツは、フランス等と比べると進歩と革命の伝統は影がうすい。マルクスやエンゲルスをして「ドイツの悲劇」(deutsche Tragödie)<sup>(1)</sup>といわしめたところのもの、すなわち、精神史上の栄光と政治上の悲惨の同時存在が想起される。もとより、農民戦争、一八一三年の人民蜂起、一八四八年の革命というように革命の伝統ないしは、自由と民主主義を志向する運動の伝統が存在しなかったわけではない。しかし、「一八四八年革命を鎮圧したその当人が、…この革命の遺言執行人になる」と<sup>(2)</sup>といった後発資本主義国ドイツにおける「上からの革命」、ブルジョア革命なしの「革命」の展開があり、ドイツの国家的統一とその後の帝国主義的發展という現実のなかで、進歩と革命の伝統は、

国民意識のなかにプラス・シンボルとして定着できなかったのである。

フランス共産党が、「左には敵はいない」とされる政治風土のなかで、国民意識においてプラス・シンボルとして定着している自国民の進歩と革命の伝統を「国民的伝統」として前面におしだしたのとは、事情が異なっていた。

ドイツの場合、プラス・シンボルは「ビスマルク (Otto Fürst von Bismarck) であり、皇帝 (Kaiser) であり、理念としては、「世界に冠たるドイツ」(Deutschland, Deutschland über alles)、「ヨーロッパの心臓」(Europas Herz) という国家主義的色彩の強いものであった。一般に、第一次世界大戦前においてドイツの「国民的伝統」として国民意識の深層に浸透していたのは、革命の伝統ではなく、これらの方であった。第一次大戦前のドイツ社会民主党の「国民化」は、このような国民大衆の意識を背景としていることは言うまでもない。また、「国民的イデオロギー」という点からみるならば、英仏などのそれと違って、個人的自由のイデオロギーではなく、むしろ国家権力に対する個人的服従、いうならば、国民 (Nation) のイデオロギーではなく、「臣民」(Subjekt) のイデオロギーであった。

誤解をおそれずにあえていうならば、内には民主主義を志向し、外には独立を志向する、そのような主体的国民意識に支えられた、その本来の意味での国民、その「国民的伝統」の形成は、ドイツの場合、一九一八年の革命以降にそのチャンスがあったといえる。実際、十一月革命は、大衆のなかにあったもろもろの価値意識に動揺をあたえた。プロレタリア革命を志向する勢力は、この革命のなかに、「ドイツの国民的伝統」の転換と、それにもなう「ドイツの悲劇」に終止符をうつことを意識していた。例えば、革命的オプロイテ (revolutionäre Obleute) の指導者であり、のちに共産党に合流するドイミッシェ (Ernst Däumig) は、「国民議会カレテーカ」の論争において、次のように述べる。

「数十年來の遺産である臣民根性・下士官根性が革命のなかにも巢食っており、この根性は、二年や三年に一度の選挙戦やその時に撒かれる選挙ビラによっては、除去することができない。この根性を根絶するには、ドイツ人民を不<sup>(3)</sup>断に能動的に保とうとする力強い試みが必要であり、それはレーテ体制によってのみなされる。」

彼は、「臣民根性・下士官根性」が身にしみついているドイツ人民に能動性を育てることが、現今の革命の課題であり、それはレーテ制度でなければ果すことはできないと強調した。

ドイツ共産党は、「国民議会」を選択した大衆と組織労働者に圧倒的影響力をもったドイツ社会民主党の存在を前提としながら、個々の闘争をつみかさねていくなかで、大衆のなかにある否定さるべき観念や生活感覚をとりのぞき、古い「国民的伝統」を打破し、反体制側による新しい「国民的伝統」の形成に関与しなければならなかった。ドイツ共産党は、既存の「国民的伝統」を立脚点とすることはできなかった。それを新しく形成する必要があった。ドイツ共産党は、何に立脚点をみいだそうとしたか？ ドイツ共産党は、どのようにドイツ的「個性」、すなわち普遍的価値の追求をめざすプロレタリア革命運動の民族的形態を模索したか？ 以下、二つの時期に分けて考察したい。

## (二) 戦後革命期（一九一八—二三年）の統一戦線運動におけるドイツ的「個性」の追求

この時期の特徴は、ドイツ共産党が試行錯誤のなかでコミンテルン執行委員会と異なる「社会主義へのドイツの道」を定式化し、それにもとづいて、ヴェルサイユ体制による民族的抑圧下において、文字どおり国民的規模での統一戦線への結集をめざした点にある。

### (a) 社会主義へのドイツの道

一九一八年一月に発生したドイツ革命は、プロレタリア革命への転化を阻止しようとするドイツ社会民主党指導部と軍部・支配層との同盟のため、さらなる前進を阻まれた。その過程で、ドイツ共産党は、一九二〇年の反カップ闘争、二一年の「公開状戦術」そして「三月行動」(Märzaktion)とジグザグコースをとりながら、ドイツ独特の政治的条件についての認識を深めた。それは、ドイツ共産党の「個性」の主張となってあらわれる。一九二二年一月七日に発表された『ドイツ共産党綱領草案』(Programm der Kommunistischen Partei Deutschlands) \textless;Sektion der Kommunistischen Internationale\textgreater; Entwurf) は、その象徴であった。同綱領草案作製に関与した同党幹部アウグスト・タールハイマー (August Thalheimer) は、のちにその問題意識について次のように語った。

「コミンテルン執行委員会の誤りは、ロシアにおけるプロレタリア革命の進行とドイツにおけるそれとの共通点を一面的に強調し、両者の間の差異をなすところのものを充分理解しなかつた点にある。レーニンは、すでに数年前にこれらの差異を理解することが非常に重要であることを強調している。この差異を見つけたし、それを政治的実践において承認させることはドイツ共産党のまず第一の任務である。<sup>(5)</sup>」

このような問題意識を背景としてつくられた同草案は、ブルジョア民主主義の積極的評価、資本主義体制内における改良の積極的評価、「労働者政府」(Arbeiterregierung)の戦略的位置づけ等に特徴がみいだされる。<sup>(6)</sup>そこに示された革命路線は、議会制民主主義を一応の前提として、統一戦線を「戦術」ではなく、プロレタリア革命の「戦略」にまで高め、「労働者政府」が社会主義への移行形態となりうる可能性を明らかにしたものであった。あえていうならば、今日のユーロ・コミュニズムに代表される「社会主義への民主主義的な道」を先駆的に模索したものといえよう。<sup>(7)</sup>

ドイツ共産党によってコミンテルンの基本路線と異なる戦略路線が対置されたことは、国際的にも、同党内におい



でもはげしい論議をまきおこした。とくに批判は、社会主義への民主主義的な道について集中した。それに答えて、共産党中央部 (Zentrale) は、次のように反論した。

「たしかに、労働者政府は権力の問題を解決しない。それはプロレタリアート独裁によってのみ解決される。……労働者政府は、民主主義的幻想とむすびついている。民主主義的伝統をもたないロシアの同志と比べて、われわれがこの幻想を克服することはより困難である。<sup>(8)</sup>」

ドイツ共産党中央は、ロシアとは異なった政治状況、すなわち、西欧型の議会主義がはるかに強力で、労働者階級のなかの改良主義がはるかに根強い状況においてのプロレタリア革命戦略の民族的形態を求めようとしたのである。その際、党中央は、「民主主義的幻想」および「民主主義的伝統」の存在を強調した。これはドイツにおいてブルジョア革命の挫折などにより民主主義の伝統が「国民的伝統」にまで高まっていけないにせよ、ロシアに比べればより大きな伝統として存在し、とくに一月革命以来、大衆の民主主義実現への強い願望と期待が増大している点を認識し、それをふまえて自らの革命路線を組み立てようとしたのである。<sup>(9)</sup>そのような革命路線が実践のなかで試されたのが、一九二三年の政治危機においてであった。

(b) 反クーノー統一戦線と「国民的解放」の提起

一九二三のドイツの政治状況は、ルール占領、インフレーション、左・右の大衆運動の高揚などによって特徴づけられるが、このなかで、ドイツ共産党の「個性」の追求は、さらに拡大する。

ドイツ共産党中央は、一九二三年春以降「国民的党」(Nationale Partei) というシンボルをかかげはじめる。クララ・ツェトキン (Clara Zetkin) は、その根拠について次のように述べる。

「大ブルジョア支配下において労働者とともに国民の運命に関する決定から排除されている小市民と知識人は、労働者階級との歴史的運命共同体 (geschichtliche Schicksalsgemeinschaft) を認識せざるをえなくなる。今日の課題は、彼らと共に戦いながら、祖国を奪還すること、すなわち祖国ドイツの解放と再興のための第一歩を踏み出すことである。」<sup>10)</sup>

ツェトキンは、ヴェルサイユ体制の抑圧からの解放をめざし国内のあらゆる分離主義運動に対決していくために、労働者階級と中間層との同盟の意義を強調した。彼女は、それゆえに国際主義的任務をもつ党こそ、「国民の党」にならなければならないとしたのである。また、一九二三年五月に発表された党の決議は次のようにいう。

「ドイツ・ブルジョアジーは、もはやドイツにおける民族解放闘争の旗手ではありえない。彼らは、現実に協商国とたたかって勝利をおさめうる力もなければ、真剣にそうするだけの用意もない。だからまた、彼らがかきたてた民族および民族主義的な気分は、結局は彼ら自身にその矛先をむけざるをえないのである。労働者階級だけが、勝利を収めたのちに、ドイツの土地、ドイツ文化の宝、ドイツ民族の未来を守ることができるといふことを、民族主義的気分をもった広範な小市民および知識人の大衆に理解させることが、ドイツ共産党の任務である。」<sup>11)</sup>

さらに、排外主義的ナシヨナリズムを煽る極右勢力から「国民的」という切札を奪いとるために、ラデック (Karl Radek) らのいわゆる「シュラゲター・キャンペーン」なども企みられた。<sup>12)</sup>

危機的状況の深化とともに、ドイツ共産党の影響力は増大した。統一戦線運動は、「管理委員会」(Kontrollausschuss)、「革命的経営評議会」(revolutionäre Betriebsräte) などの形態で発展し、中間層を含むかなり広範な大衆を結集することに成功した。<sup>13)</sup> ザクセンをはじめとして地方的レベルでの統一行動・統一戦線が実現し、八月には中央レベルにおいても反クラーノー (Wilhelm Cuno) 統一戦線が結成され、ゼネストの力を背景にクラーノー政府を打

倒するところまで進んだ。<sup>(14)</sup> ドイツ共産党は、政治危機のなかで、「国民の党」「国民的解放」などをかけ、革命へと導くことができるかにみえた。しかし、じつは当時のドイツ共産党中央には意識されなかった問題点がまちらうけていた。

(c) 一九二三年革命敗北の意味

それは、さきにもふれた統一戦線運動における「革命的飛躍」の問題である。ドイツ共産党中央は、「国民的なもの」「民族的なもの」を重視し、それをとりこむことにより、統一戦線に結集する幅を拡大する努力をした。じつは、そのことが「革命的飛躍」の問題を提起するのを困難にしたのである。<sup>(15)</sup> 困難にしたというよりそのような発想はついに生まれなかったといった方がいいかもしれない。八月から九月にかけての政治危機のなかで、「飛躍」の問題を提起しなければならなかったドイツ共産党中央は、「上からの」統一戦線の拡大と議会を通じての「労働者政府」の樹立に全力を傾け、その機会を逸してしまった。それとともに、統一戦線自体も崩壊してしまい、一〇月国防軍の圧力の前に敗北した。

革命の敗北は、ドイツにおける特殊な条件をふまえて、プロレタリア革命のドイツ的形態を模索しようとした革命路線の断絶を意味した。その後も、のちにみるようにファシショ化過程において、現実を反映したいくつかの試みがなされたが、それらはいかに全党的なものになりえなかった。

それは、革命の敗北後、一九二四年から開始された「ボリシェヴィキ化」(Bolschewisierung)の影響が大であったからである。<sup>(16)</sup> それまでのドイツ共産党は、資本主義諸国における最強の党として、また世界革命の成否を決するドイツ革命の現実的展望をもった党として、今日われわれが考える以上の「權威」をもっていた。しかし、それがド

イツ革命の失敗という事実の重みによって、しかも、敗北の原因がロシア革命の経験からの逸脱にあったと総括されるとき、ロシアの経験を過度に一般化したコミンテルン路線の「正しさ」が一段と強調されることになる。それ以降ファシズムへ敗北するまでの国際共産主義運動において、コミンテルン執行委員会に対抗して、自らの「個性」をおしだすことは、非常に困難なものとなった。そこでつぎに、目をファシショ化過程に転ずることにしたい。

- (1) 「ドイツの悲劇」については、マルクス「ヘーゲル法哲学批判序説」(『マルクス・エンゲルス全集』第一巻、大月書店、一九五九年、四一八ページ。)を参照されたい。(Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band I, Institut für ML beim ZK der SED, Berlin 1956, S. 381.)
- (2) エンゲルス「イタリヤの読者へ」(『マルクス・エンゲルス全集』第四巻、六〇六ページ。)
- (3) Cunter Hinman (Hrsg.), Die Rätebewegung I, Hamburg 1971, S. 78. 野村修編『ドキュメント現代史2・ドイツ革命』平凡社、一九七二年、七七ページ。なお、三宅立「第一次大戦期のドイツにおける『プロレタリアの世界』」(『現代史研究』現代史研究会、第二七号、一九七三年八月刊・所収)六〇—六二ページを参照されたい。
- (4) 一九二〇—二一年におけるドイツ共産党のジグザグコースについては次を参照されたい。B. Lazitch, M. M. Drac-hovitch, Lenin and the Comintern. Vol. I, Hoover Institution Press, California, 1972, pp. 528—569. 拙稿「統一戦線理論の形成過程——『労働者政府』論を中心として——」(『政治研究』第一八号、一九七〇年三月刊・所収)、拙稿「ヴァイマル・デモクラシーの危機と統一戦線——一九二〇年の反カッパ闘争——」(『九大法学』第二六号、一九七三年六月刊・所収)。
- (5) August Thalheimer が、一九二三年革命の敗北後に発表した論文の一節である。このタイトルハイマー論文は、コミンテルン第五回大会において、ルート・フィッシャー(Ruth Fischer)のほげしい批判をあびた。  
(Protokoll fünfter Kongress der Kommunistischen Internationale, Hamburg 1924, S. 198.)
- (6) 『ドイツ共産党綱領草案』の特徴についての詳しくは、拙稿「政治危機と統一戦線(一)——一九二三年のドイツ『革命』——」(『北九州大学法政論集』第一巻創刊号、一九七四年三月刊・所収)二〇〇—二〇五ページを参照されたい。

- (7) ユーロ・コミニズムの起源について、多くの論者は、一九三五—一六六年の反ファシズム人民戦線およびその後のレジスタンス、一九五六年のスターリン批判、一九六八年のチェコ事件、一九七二年のチリ人民連合政権の成立などにもとめていゝ。それらは、広い意味で、いわゆる「スターリン主義」からの脱却の時点をかきと考えられる。そうだとすれば、逆に「スターリン主義」の生成以前にもさかのぼりうる可能性があるわけである。一九二二—三三年のドイツ共産党の場合は、そのような意味でもっと注目されていゝと考へる。
- (8) Bericht über die Verhandlungen des III. (8) Parteitages der Kommunistischen Partei Deutschlands, Berlin, 1923, S. 332—3.
- (9) 「民主主義的幻想」とその問題点については、斎藤哲「ドイツ共産党の労働組合政策」（『政経論叢』第四八卷三・四号、一九七九年刊・所収）九五—一〇五ページを参照されたい。
- (10) Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, III., a. a. O., S. 379—380.
- (11) Bericht der Exekutive der Kommunistischen Internationale, 15. Dezember 1922—15. Mai 1923. Moskau, 1923, S. 73.
- (12) シュラゲーター・キャンペーンについて、E. H. Carr, The Interregnum 1923—24, London, 1954, pp. 179—184, を参照されたい。
- (13) 中間層重視の統一戦線構想およびその実際の運動については、拙稿「コミンテルン初期のファシズム認識——ドイツ共産党の分析との関連を中心に——」（『法政研究』第四六卷第一号、一九七九年一〇月刊・所収）五七ページを参照されたい。
- (14) 詳しくは、拙稿「政治危機と統一戦線」(『北九州大学法政論集』第三卷第一号、一九七五年六月刊・所収)二五—二八ページを参照されたい。なお、この時期を扱った研究として、木全清博「ドイツ共産党(KPD)のプロレタリア統一戦線運動」(『歴史研究』(大阪教育大学)第一号、一九七三年刊・所収)、菊川清美「ヴァイマル共和国初期労働者政府運動の一考察」(『歴史評論』第三〇〇号、一九七五年刊・所収)、山田徹「ドイツ共産党の統一戦線運動の構造」(『神奈川法学』、第二二卷二・三号、第一三卷三号、第一四卷二・三号、一九七八—一九七九年、が参考になる。
- (15) 「革命的飛躍」の問題については、拙稿「コミンテルン第五回大会の再検討——統一戦線論の発展について——」（『北

九州大学法政論集』第三卷第四号、一九七六年三月刊・所収) 七四―七七ページを参照されたい。

(16) 溪内謙氏は、スターリン体制とかスターリン自身の発想とロシアの土着的なるものとの關係を次のように指摘されている。「スターリンのマルクス主義は、プレハノフ、マルトフ、レーニン、トロツキー、ブハーリンらによって代表されるロシア・マルクス主義に対する土着的反逆であったと位置づけることが可能である。……初期ポリシエヴィキ指導者は、マルクス主義を、それを育んだ西欧の合理主義的基盤と不可分に結びつけてうけいれていたのである。……スターリンはこの点で例外に属した。」(『現代社会主義の省察』岩波書店、一九七八年、二〇六ページ。)

### (三) ファッション化過程における統一戦線運動の「個性」

この時期の特徴は、「普遍性」を強調するコミンテルンが提示する一般的方針の追求と、ファシズムの台頭という現実により再び必要となったドイツ共産党の「個性」が交錯し、後者が充分成長しえないままファシズムに敗北を喫したところにある。

#### (a) 『ドイツ人民の民族的・社会的解放のための綱領的宣言』

最近の研究においては、この時期のドイツ共産党の動向を「社会ファシズム論」のみで説明しようとするものは少なくなつたようである。<sup>1)</sup>しかし、ファッション化過程(一九二九―三三年)におけるドイツ共産党のブレないしはシグザグコースを、主としてモスクワの動向や共産党内部の指導権争いによるものであるとし、ドイツ共産党が当時の状況下における大衆の複雑な動向によって規定されていた側面を軽視ないし無視する傾向がある。この時期のドイツ共産党の「個性」の追求は、主としてそのような大衆的動向によって規定されていたといえよう。

「普遍性」を強調するコミンテルンは、一九二八年の第六回大会において定式化した「第三期論」にもとづき階級

闘争の激化→「革命的危機」の到来というコースを想定し、基本的には、「革命的危機」の醸成にむけての統一戦線の推進を第一義的に重視した。<sup>(2)</sup>「革命的危機」の到来を前提とするならば、そこからはある意味で、社民主要打撃論や「社会ファシズム論」<sup>(3)</sup>がでてきてもおかしくないといえる。だが、実際にはファシショ化の進行は、ある種の政治危機（「特殊な政治危機」）をもたらしたが、「革命的危機」をもたらさなかった。<sup>(4)</sup>ドイツ共産党は、この理論と現実とのギャップのなかで、コミンテルン執行委員会の強調する「普遍性」への疑念をいだき、再び「個性」の追求を模索せざるをえなくなるのである。

一九三〇年八月二四日に発表された『ドイツ人民の民族的・社会的解放のための綱領的宣言』(Die Programm-  
erklärung der KPD zur nationalen und sozialen Befreiung des deutschen Volkes)は、闘争の主要な矛先を、ナチスにむけている。当時ナチスは、広汎な国民に反ヴェルサイユの心情を煽り、非合理主義的大衆運動を組織することに成功しつつあった。コミンテルン執行委員会と異なった主敵の設定をおこなった『綱領的宣言』が、誰れのようなイニシアチヴによってつくられたのかは興味のあるところであるが、研究者の見解は真っ向から対立している。東側の研究者は、党議長テールマン(Ernst Thälmann)の指導のもとに作製されたと強調し、西側の研究者は、のちに党から追放される政治局員ノイマン(Heinz Neumann)の努力によるものだとしている。<sup>(5)</sup>信頼にたる資料や党内事情が明らかにされていない今日、どちらと断定することは差し控えねばならないが、いずれのイニシアチヴにせよ、ナチスの急上昇という状況とのちに明確な姿を現わす反ナチスの大衆的気運によって押し上げられたものであったことは確かである。

『綱領的宣言』は、「プロレタリアート独裁の鉄槌のみが、ヤング案と民族的抑圧の鎖をうちくたく。労働者階級の社会革命のみがドイツの民族問題を解決できる」とし、民族的解放の問題と社会革命との関連を前面におしだし

た。この『宣言』とそれにもとづく実践は、かなりの反響をよび、周知のようにナチ党員の国防軍将校シェリンガー(Richard Scheringer)が獄中で共産党に転向するといった事態も生まれた。ドイツ社会民主党は、この『宣言』を共産党のナショナリズムへの転身であり、ナチスと同じ基盤に立ち上った証左だとの批判を展開した。結局のところ、民族的問題を基礎として労働者階級と中間層の同盟をめざした『宣言』は、ナチスはまもなく衰退するだろうというナチスの過小評価、ドイツにおける革命の可能性への過大評価にもとづくファシズムかプロレタリアート独裁かというコミンテルンの一般的思想の枠組にしばられて、自己を実現できなかった。

しかし、一九三〇年末には、恐慌の影響が勤労大衆の生活を破壊し、ドイツ共産党の予想をはるかにこえて急速な躍進をとげたナチスが、各地で労働者運動への無差別的攻撃をかけるようになってきた。失業と生活に苦しむ労働者のなかから、自然発生的な反ファシズムの気運と統一への志向が生まれ、現実の運動として展開されはじめた。

(b) 反ファシズム会議運動

現状打破の意欲をひめた労働者大衆は、「職・パン・自由」をもとめファシズム化に反対する大衆運動を組織した。この自然発生的大衆運動は、各地で統一を志向した反ファシズム大衆集会を組織した。このような反ファシズム大衆運動(仮りに、「反ファシズム会議運動」とよぶ)の全貌は、従来の研究において明らかにされていない。<sup>(8)</sup>一九三〇年冬から三二年夏にかけての大衆レベルにおける動きに対して、ドイツ共産党指導部の対応は、かなり屈折したもとなつてあらわれる。三〇年冬と三一年春には、このような大衆的動向のなかにこそ、反ファシズムの本隊を発見し、それを革命への手掛りにしたいという考えをもった党幹部レンメル(Hermann Remmele)らに対して指導部は、「メンシェヴィキ的である」との批判をおこなう。<sup>(9)</sup>また、本来はこのような自然発生的大衆運動との関連で提起



された『人民革命』(Volksrevolution gegen Faschismus) 構想からコミンテルンの一般的思考の枠組への換骨奪胎化がなされた<sup>(9)</sup>。しかし、三二年五月になると、ドイツ共産党中央委員会が『反ファシズム行動』(Antifaschische Aktion) と名づけた方針を提起し(五月二四日のドイツ共産党中央委員会総会)、これらの大衆的動きを追認しながら、反ナチ闘争を組織しようとする。

ドイツ共産党指導部の屈折した対応のなかに、コミンテルンの強調する「普遍性」とドイツ共産党の「個性」との葛藤のあとをみることが出来る。だが、ドイツ共産党のよびかけた『反ファシズム行動』は、めざしたような広汎な大衆を結集することに成功しなかった。その原因は、客観的条件としては、ファシショ化にともなう「特殊な政治的危機」がもつ運動への規定性があり、主体的条件としては、コミンテルンの一般的路線の枠組みにしばられて、ドイツ共産党が『反ファシズム行動』で行くのだという姿勢をもう一步本気で貫き通せなかったところにあった。一九二三年の革命敗北が大きく影を落していたのであろう。そのころ、ナチスは三二年一月の選挙において二〇〇万票を一挙に減らし、一定の党内危機におちいつていた。反ファシズムの側が、そのチャンスを生かせなかったのである。

(1) 最近の研究は、「社会ファシズム論」のかなり微妙な変遷について詳しくフォローしている。Vgl. P. H. Lange, Stalin versus "Sozialfaschismus" und "Nationalfaschismus", Göttingen 1969, Th. Weingartner, Stalin und der Aufstieg Hitlers, Berlin 1970, 富永・鹿毛・下村・西川『ファシズムとコミンテルン』東大出版会、一九七八年。

(2) 一九三〇年代初期のドイツ共産党の統一戦線論については、拙稿「一九三二年の反ナチ統一戦線問題——ドイツ共産党の動向を中心として——」(『法政研究』第四五巻第二号、一九七九年二月刊・所収) 二二二—二四〇ページを参照された。

(3) 「社会ファシズム」という場合の「ファシズム」は、今日しばしば誤解されているように、ナチズムと同じものだという意味ではなく、より、広義の「反動・反革命」という意味であった。(前掲拙稿「コミンテルン初期のファシズム認識」

五〇ページを参照)

- (4) 「特殊な政治危機」については、山口定『現代ファシズム論の諸潮流』有斐閣、一九七六年、九一ページを参照された。山口氏は、「『革命的危機』の概念と前述の意味での『政治的危機』の概念とを一応区別したうえで、その両者の関連を検討しつつ情勢分析を行なうという視点が絶対に必要であった。この点に関するマルクス主義政治学の『情勢』論、『危機』論の立遅れは、人民戦線の時代を経て基本的には今日まで続いている。」(同、九八ページ)と指摘されている。

- (5) Vgl. K. Mammach, Bemerkungen über die Wende der KPD zum Kampf gegen den Faschismus, in: BzG, Jg. 5 (1933) H. 4, S. 660., Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, IV., a. a. O., S. 255., Siegfried, Bahne, Die KPD und das Ende von Weimer, Das Scheitern einer Politik 1932—1935, Frankfurt/M 1976, S. 14., Horst Duhnke, Die KPD von 1933 bis 1945, Köln, 1972, S. 20. (フュルンケ、救仁郷繁訳『ドイツ共産党一九三三—四五年』上巻、ベリカン社、一九七四年、二四—二五ページ) Ossip K. Flechtheim, Die Kommunistische Partei Deutschlands in der Weimarer Republik, Frankfurt/M., 1969, S. 275. (フレイヒトハイム、足利末男訳『ヴァイマル共和国時代のドイツ共産党』東邦出版社、一九七一年、二五五—二五六ページ)
- (6) Der Abend von 25. August 1930. (Berlin).
- (7) 拙稿「ワイマル共和制期の統一戦線運動——成立条件に関する一試論——」(『法政研究』第四六巻第二—四合併号、一九八〇年三月刊・所収)五九七—五九九ページを参照された。
- (8) 例えば、このことによれた研究には次のようなものがある。Fritz Kriegenherdt, Der Kampf der KPD in Dresden um die Aktionseinheit der Arbeiterklasse gegen die drohende Gefahr des Faschismus und des Krieges, Phil. Diss., Dresden 1961, S. 57—62.
- (9) ドイツ共産党一月総会におけるテールマンの発言(Die Rote Fahne von 24. Januar 1931.)
- (10) 「人民革命」については、前掲『ファシズムとコミンテルン』一九二—二三ページを参照された。ただ、ここでは、反ファシズム大衆運動との関連は、かならずしも明らかにされていない。

## む す び

さて、最後に、以上述べてきたことをふりかえり、むすびとしたい。

ドイツ・コミュニズムの課題は、「国民的伝統」の継承というよりは、その克服と新しい形成にあった。ワイマール期のドイツ共産党は、革命運動の民族的形態、すなわち個性の追求のなかで、その課題に応えようとした。戦後革命期においては、ブルジョア民主主義を前提として「社会主義へのドイツの道」をつくりあげ、「国民的」というシンボルも大胆に提起した。それは、コミンテルンの「普遍性」の強調に対するドイツ的「個性」の主張であった。しかし、二三年の政治危機のなかで、国民的統一戦線、すなわち国民諸階層を幅広く結集することにのみ、重点をおきすぎたために、「革命的飛躍」の問題を提起できず、革命は敗北した。敗北という事実の重みは、以後ドイツ共産党の「個性」の追求そのものを困難にした。そして、コミンテルンの主張する「普遍性」も、ロシア革命の経験を過度に一般化したものになってしまっているのである。しかし、ファシショ化過程によっては、『ドイツ人民の民族的・社会的解放のための綱領的宣言』、「人民革命」、「反ファシズム会議運動」というように、ドイツ共産党の「個性」の主張がおこなわれてくるが、「普遍性」と「個性」の調和的結合ができないまま、ナチズムに敗北したのである。ワイマール期のドイツ共産党は、「国民的伝統」や「ナショナルなもの」を軽視もしくはふまえなかつたために失敗したのではない。以上のべてきたように、その問題を重視し、それなりの努力をしたのであるが、課題を達成できなかったのである。今日のユーロ・コミュニズムは、「個性」の最大限の追求のなかで、その未解決の課題に挑戦しているといえる。

〔追記〕 本稿は、一九八〇年一月一八日に日本政治学会研究大会の分科会◎で行った報告（「ドイツ共産党と△国民的伝統▽——ワイマール期における共産主義運動の△個性▽を中心として——」）に、加筆訂正を行なったものである。分科会での司会者・野口名隆氏、報告者の田中正人氏、討論者の加藤哲郎氏、斉藤哲氏をはじめ出席された多くの方々から貴重なご意見をいただいた。心からお礼を申し上げるとともに、残念ながら本稿に充分に生かしえなかった点については、今後の研究の課題としたい。

〔一九八一年一月〕

参 考 文 献 (※註しあるものは参考文献)

- A. Dokumente und Materialien
1. Antifaschistische Aktion. Dokumentation und Chronik Mai 1932 bis Januar 1933, Berlin 1965.
  2. Die Bolschewisierung der KPD, Dokumente und Analysen zur Kommunistischen Arbeiterbewegung Bd. I, Berlin 1974.
  3. Degras, Jane (ed.), The Communist International 1919—1943. Documents I—III, London, 1956—1965.
  4. Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, VII, VIII, Berlin 1958.
  5. Dokumente zur deutschen Geschichte, hrsg. von Wolfgang Ruge und Wolfgang Schumann. Bearbeitet von Kurt Gossweiler unter Mitwirkung Margarete Plesche, Berlin, 1975.
  6. Faschismusanalyse und Antifaschistischer Kampf der Kommunistischen Internationale und KPD 1923—1945, Heidenberg, 1973.
  7. Pirker, Theo (hrsg.), Kommintern und Faschismus. Dokumente zur Geschichte und Theorie des Faschismus, Stuttgart, 1965.
  8. Ursachen und Folgen. Vom deutschen Zusammenbruch 1918 und 1945 bis zur staatlichen Neuordnung Deutschlands in der Gegenwart, VIII: Die Weimarer Republik. Das Ende des Parlamentarischen Systems.
  9. Weber, Hermann (hrsg.), Der deutsche Kommunismus. Dokumente 1915—1945, Köln, 1963.
  10. Ders., Die Kommunistische Internationale. Dokumentation, Hannover, 1966.
  11. Zur Geschichte der Kommunistische Partei Deutschlands. Eine Auswahl von Materialien und Dokumenten aus den Jahren 1914—1946, Berlin, 1954.
- B. Zeitschriften und Zeitungen
1. Internationale Presse-Korrespondenz für Politik Wirtschaft und Arbeiterbewegung. Deutsche Ausgabe, 1921—1933.
  2. Die Internationale. Zeitschrift für Praxis und Theorie des Marxismus, hrsg. v. der Zentrale der KPD, 1920—

1932.

3. Internationale Gewerkschafts-Pressekorrespondenz. Deutsche Ausgabe, Jg. 1 (1931).
4. Die Kommunistische Internationale. Organ des Exekutivkomitees der Kommunistische Internationale, 1919—1933.
5. Die Rote Fahne. Zentralorgan der KPD (Sektion der KI), 1921—1933.
6. Rundschau über Politik, Wirtschaft und Arbeiterbewegung. 1932—1939.
7. Unter dem Banner des Marxismus, Jg. IV (1930), Jg. V (1931).
8. Vorwärts. Zentralorgan der SPD, Jg. XVII (1930), Jg. XVIII (1931).
9. Völkischer Beobachter. Kampfblatt der national-sozialistischen Bewegung Grossdeutschlands, Jg. 43 (1930), Jg. 44 (1931).

#### C. Zeitgenössische Literatur

1. Fischer, R., Stalin und der deutsche Kommunismus, Frankfurt/M. 1948.
  2. Leviné-Meyer, R., Inside German Communism, London, 1977.
  3. Thälmann, Ernst, Reden und Aufsätze zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, 2Bde., Berlin, 1956.
  4. Ders., Geschichte und Politik, Artikel und Reden 1929—1933. Berlin, 1973.
  5. Ulbricht, Walter, Zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung aus Reden und Aufsätzen. Bd. I, 1918—1933, Berlin, 1953.
  6. Ulbricht, Walter, Volkrevolution gegen Faschismus! Rede des Genossen Walter Ulbricht vor den Funktionären der KPD, hrsg. v. ZK der KPD, Berlin, 1931.
  7. Zetkin, Clara, Ausgewählte Reden und Schriften, Band II (1918—23), Berlin, 1960.
- D. Darstellungen und Untersuchungen
1. Angress, Werner T., Stillborn Revolution, The Communist bid for Power in Germany 1921—1923, Princeton, New Jersey, 1963.
  2. Bahne, Siegfried, Die KPD und das Ende von Weimar, Das Scheitern einer Politik 1932—1935, Frankfurt/M.

- u. New York, 1976.
3. Berthold, Lothar, Das Programm der KPD zur nationalen und sozialen Befreiung des deutschen Volkes vom August 1930, Berlin, 1956.
4. Borkenau, Franz, European Communism, London, 1951.
5. Der, World Communism, A History of the Communist International, New York, 1939.
6. Carr, E. H., The Interregnum 1923—1924, London, 1954.
7. Ersil, Wilhelm, Aktionseinheit Stürzt Cuno, Berlin, 1963.
8. Goldbach, M. I., Karl Radek und die deutsch-sowjetische Beziehungen 1918—1923, Bonn, 1973.
9. Krusch, H. Joachim, Um die Einheitsfront und eine Arbeiterregierung, Berlin, 1966.
10. Neue Probleme der der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung in Forschung und Lehre, 1917—1945, Akademie Verlag, Berlin, 1965.
11. Poulantzas, Nicos, Fachisms und Diktatur, Die Kommunistische Internationale und Faschismus, München, 1973.  
『フツリズムと独裁』田中正人訳、社会評論社、1978.
12. Raase, Werner, Zur Geschichte der Deutschen Gewerkschaftsbewegung 1919—1923, Berlin, 1967.
13. Reisberg, Arnold, An den Quellen der Einheitsfrontpolitik, Der Kampf der KPD um die Aktionseinheit in Deutschland 1921—1922, Dietz Verlag, Berlin, 1971.
14. Ders., Lenin und die Aktionseinheit in Deutschland, Dietz Verlag, Berlin, 1964.
15. Rosenberg, Arthur, Entstehung und Geschichte der Weimarer Republik, Frankfurt/M. 1955.
16. Weber, Hermann, Die Wandlung des deutschen Kommunismus, Die Stalinisierung der KPD in der Weimarer Republik, 2 Bde. Frankfurt/M. 1969.